

しかも新しい未知の史料を豊富に盛り込んだ岐阜県史および岐阜市史が続いて刊行せられることを、注目すべき快挙として紹介する次第である。各巻ともA五版八〇〇〜一、〇〇〇頁。元売捌書店は岐阜市神田町六丁目大衆書房。各巻三、〇〇〇〜四、〇〇〇円前後。

(坪内庄次)

佐藤甚次郎著 生活文化と土地柄

—生活地理学序説—

地理学を構成する根本概念を、地域・分布・環境とするならば、それが自然現象であろうと、社会現象であろうと、この根本の概念にしたがって分析や総合がなされるならば、それはどんな名称を何と言ってつけようと、地理学的ベースに基づく研究であることに違いない。

人文地理学は地理学の中でも、人間活動によるもろもろの現象を地理的観点から研究することを主体として発展したものであることは言うまでもないが、その人間活動の根底である衣・食・住などの生活の営み方や、そこに形成された生活文化を人文地理学で研究対象とすることが、従来きわめて閑却されてきたのである。この点については、故内田寛一先生は早くよりこの部門の研究の必要性を主張され、昭和一二年には既に「郷土地理・特に衣食住について」などを発表しておられる。本書の著者が、現在この部門のオーソリテ―として活躍しているのも、かつて、内田先生の要望により、大学で「生活地理学」の講義をするように言われたことより始めると聞

いている。著者が最初は何をどのようにやったらよいか、いささか面喰ったと聞いているが、そこは著者本来の深遠多才な背景や、応用能力の卓越していた素質があったればこそ出来たものであることは申すまでもない。

絢爛たる美しさをもった学問の世界で、「高尚」と言うことからするなら、日常生活などの具体的事象を多く取り扱うことは、多少逸脱とみなされがちであるが、しかし、人間生活本来の姿を通じ、人間の地域的分化や、地域的特色を知るには、最も優れた指標として注目しなければならぬ。しかも、人文地理学では、地表上の諸地域で展開されている人間活動の様態を対象として、その本質なり実態を正しく把握することを重視されなければならない以上、奇麗ごとのみ並べたても真の解明にはならない。したがって最も根本的な主要課題として衣・食・住などは解明されなければならないのに、このような著書が今までにあまり見られなかったことは、むしろ不思議なくらいである。変転きわまりない経済情勢、今日こそ、人間生活とは何であるかを明確にしておく必要がある。

本書では地表上の諸地域でどのような生活が営まれ、それが生んだ文化は、現在いかなる地域にどのような形態で残存しているかなど、歴史地理的に極めて多くの具体例をあげて述べている。さらに生活に関する多くの資料をもとに、人間、そして生活の在り方が根本的に問われているし、また、現時点では、どのように認識するか、思考の基盤はどこにおくかなどを解明し、生活を土地に密着した実例で述べ、また、その文化を論じ、しかも、系統的学問体系の中に組み込まれたユニークな極めて優れた必見の書である。

本書の構成は全体で十一章からなり、その中を細部項目に分類し、極めてわかりやすくしてある。項目はⅠ生活文化とその地域分化・Ⅱ生活および生活文化と自然環境・Ⅲ生活の主体としての人間・Ⅳ生活文化の世界化と地方化・Ⅴ人類増加の過程と居住地域の特質・Ⅵ生活文化の展開とエクメーネの拡大・Ⅶエクメーネ拡大と衣服・Ⅷエクメーネ拡大と住居・Ⅷエクメーネ拡大と食生活および食料生産・Ⅹ生活文化の土地柄・Ⅺ地理学における生活地理学となっており、日本ばかりでなく世界的視野から解說的に面白く述べているが、文化系統の発生・伝播・模倣・重層などの法則づけともなると、襟を正して読まなければならない深みのある格調の高いものである。

最後に第十一章では、本書の「むすび」的な事項が述べられている。つまり、生活地理学は対象を局限した意味での個別科学であるが、生活の営みおよび生活文化を人間活動と文化全体の一部として取り挙げ、他の地理学諸部門との連繫において理解されなければならないことを主張し、また生活文化がいろいろの学問から研究対象としているなかで、生活地理学はどのような視角からこれにアプローチするか、つまり土地によって異なる生活文化と、その形成を如何なる視座において把握するかが問題で、それは人文地理学の一部門としてその場所的異同・地域的差異を、人間と自然との相互的な関係において理解しようとするが、生活文化を対応・適応の具象として捉え、その地域的な特色を「土地の性格」との関係において把握することを意図するもの、すなわち、生活文化の「土地柄」を明らかにし、その成立の根底なり構造を究明しようとするものであると説明している。全般に本書は具体的事例を多くし、しかも、各項

目ごとにその成立から発展過程に触れ、現時点における現象にまで至るが、抽象論をなるべく少なくしており、それが一層読者に興味と関心を持たせる結果になっていると思う。

人文地理学の一分科で、広義の生活地理学とも考えられる社会地理学の提唱者はその数も多く、ブリュンヌ(J. Brunhes)などが提唱してから五十年くらいを経ている。最初は地理社会学時代であったが、社会生態学時代に至り、その後社会地理学確立時代への過程を経ている。社会地理学に対する考え方もいろいろあり、社会構造と自然との生態的關係を重視し、社会構造の地理的基盤を解明するという考えや、機能と景觀の関連を重視し、民族・国家・宗教社会と景觀地域との關係を領域とし、文化景觀型式を攻究するという考え方、或は人口・集落・社会集団・生活様式の社会的特性を領域とし、植民地理の応用を説いた考え方などがある。しかし、社会地理学は、社会様式を地理的構造との関連において機能的に考察し、地域性を把握するのがその課題であるとするのが一般的であろう。その具体的な展開ともなると、歴史地理的方法・地誌的方法・相関的方法・遷移的方法などが考えられている。

本書は生活文化の面から歴史地理的方法を主体として述べているが、項目によっては、その他の方法をもとり入れてある。

元来多彩な地表上のちがいがや發展差を解消する前に、いろいろなレベルの「地域」の姿を全体としてありのままにとらえることが、やはり出発点であり、發展段階にある地域といっても、それを構成する諸現象が有機的にからみあって成立するものであるから、地域の發展なり開發のルールには人間の生活を無視することはできない

わけである。したがって、内的にも外的にも調和のとれたものではないければならない。人間不在ないし人間疎外の発展や開発計画などは破棄されなければならないことを示唆してくれる。

本書は地理的空間を広く学ぶと同時に、歴史的事象をも学ぶことになる。しかも人間生活の中でも衣・食・住という最も基本的中心的な課題を取り扱っている。これらに関する地理学的研究は、生活地理学と称されるべき部門の重要な課題であるにもかかわらず、経済地理学や民俗学にその素材的な研究を奪われてきた傾向がある。

同じく広義の意味における生活地理学とみなされ得るものでも、集落地理・人口地理・景観地理・社会地理・疾病地理・災害地理などは、それ独自に研究がなされ、その成果も多くみられるが、本書にみられるような内容のものは、その研究成果は他の分野の研究成果に比較すると極めて少ない。

著者も「はしがき」で述べているように、テキストをも意識して、特に解説的なことを入れたと言われており、極めてわかりやすく、注及び参考文献も各ページの下端に記載され理解しやすくしてあるのは親切である。欲を言うならば、今少し図・表・写真などを用いたら一層利用者に喜ばれることであろう。少し気にかかったのは、第一章でセイロンの地名が出てくるが、これもやはりスリランカとして括弧内にセイロンとすべきであろう。また、漢字に弱くなつた現代の若い人々に理解しやすくするため、難解な古い漢字に努めて多くのカナをふってあればより親切であつたらう。ともかく本書は、筆者の長い研究成果から生じたもので、著書を出版する目的で二、三年程度で書かれた所産ではなく、その評価は日を経るに従います

ます高まって行くことと思う。

大学の教養課程として地理に興味と関心を持たせるにも、また教職課程のテキストにもなるし、特に女子の大学では、地理学関係のみならず、家政科その他一般教養課程などにも是非推奨したい。中・高等学校の教師用参考書としても、また一般社会の人々にとつても、法則づけなど一部高度な学術的事項を除けば興味あるかっこうの読物として役立つ珍しい専門図書である。

(A5判・二八七頁・大明堂刊・一八〇〇円)

(太田晃舜)

寄贈文献

(一)内は本会会員の執筆によるもの)

- 「地域研究」一六巻一、二号合併号(田中啓爾博士追悼特別号)
- (井出策夫「故田中啓爾先生特集号の発行にあたって」、岸本実「地誌学と田中先生」、小川一朗「田中啓爾先生と地図」、矢嶋仁吉「地理教育者としての田中啓爾先生」、三浦鉄郎「八幡平の巡検」、大村肇他「立正大学地理学教室と田中啓爾先生」)
- 森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究」第七報
- 安房国式内社六座のまとめ(千葉大学教養部研究報告A1B一九七五年別刷)
- 森谷ひろみ「安房国式内社に関する歴史地理学的研究」第六報
- 安房郡安房坐神社について(千葉大学教養部研究報告A18一九七五年別刷)
- 神尾明正・森谷ひろみ「千葉市大草町南光寺土師小貝塚」一九七